

(佐々木注) 1998年1月4日作成

原題「古鷹会(10年)」B5版1ページ。

以下、原文をそのままA4版に変換し、欄外にページを付与したもの。

古鷹会挨拶

平成10年1月16日

古鷹会の皆さん、新年おめでとうございます。

最初にPRを兼ねご紹介したいことがあります。水交会の一番奥に独立した部屋があり、海軍歴史保存会の事務所に提供していましたが、先般保存会の解散に伴い、一般会員の使用に供するため、10人程度の会食ができるように改装して、部屋を古鷹と名づけました。ついてはその名にふさわしい絵を掲げたいと思い、75期の木下真清さんをお願いしたところ、快く引受けて頂き、1週間江田島に泊りがけで木下さんらしい本当に心のこもった絵を描いていただきました。どうか古鷹会の皆さんもこの部屋を会食などに利用され、絵に込められた木下さんの深い思いをともに味わっていただきたいと思います。

ところで一昔か二昔前には、世界で一番幸せな男は、アメリカのサラリーを貰い、日本人の妻とともに、イギリスの豪邸に住んで中国のご馳走を食べる人と言われ、これが一つ食違って中国のサラリーで、アメリカ人の妻と日本のウサギ小屋に住みイギリス料理を食べるとなると大変だと笑ったものであります。ところが今日では、各国の国情をからかうジョークもこんなものになっているとかいらないとか。「人が喋っているのを聞けば、何処の国でおぎゃと言ったか直ぐ判る。自分の国が何でも世界一でなければ承知しない奴、そいつはアメリカ人だ。イギリスを褒め称えていたら、そいつはイギリス人だろう。日本の悪口を言っている奴、そいつは韓国人でなければ日本人だ」。細川侵略発言以来の政府国会の謝罪声明は言わずもがな、子供に教える歴史教科書問題一つをとっても、このジョークは心に堪えます。

珊瑚海海戦で戦死された翔鶴飛行隊長の高橋赫一大佐は「俺達はただ黙って戦い黙って死ねばよい。後のことは国家国民が知っている」と言い遺されたということですが、このように信じ、命を捧げて国を守ろうとされた方々の至純の思いと、今日の国情を思い合わせるとき本当に胸の痛いことであります。私どもはこのような英霊に対する慰霊顕彰とともに、本当の慰霊顕彰は、日本の精神的再建特に道義の再建にあることを思い、覚悟を新たにしたことでありました。

75期のある人から頂いた年賀状の中に「手の届くところを全力でやるより手がありません」とありました。私どもが何をやるべきか、何がやれるかと考えるとき、それぞれの環境に応じることができることに全力を尽す、それが例えば孫の教育といった身近なことでもよいではありませんか、それがすなわち一隅を照らすことであり、そのような草の根の努力を積重ねて初めて日本が良くなるのではないかと考えた新年でありました。

古鷹会のますますの発展と会員皆様のご健勝を祈って祝辞と致します。